

## 『開題』類における本覚について

関 悠 倫

### 一 問題の所在―資料の範囲―

空海(七七四―八三五)の著作の一群に、『開題』と名のつくものは二十五種類存在し、他に『指事』や『釋』の名のつく著作が数類ある。小論で取り扱う資料は、『大日經開題』・『金剛頂經開題』・『法華經開題』・『金剛般若經開題』・『梵網經開題』・『釋論指事』・『法華經釋』を用いることとする。上記『開題』類において示される「本覚」について検討することが小論の目的である。

そもそも「本覚」という語は、『大乘起信論』(以下『起信論』)において初めて登場したといわれている<sup>①</sup>。筆者は『開題』類所説の「本覚」に、『起信論』の「本覚」思想が多少なりの影響を与えていると推察する一方で、注釈書である『釋摩訶衍論』(以下『釋論』)の「本覚」思想の方が大きく影響を与えたのだと類推している。その例をあげれば、①語句の引用、②『釋論』所説「清淨本覚」や「染淨本覚」等より展開させた独自の思想である「五種本覚」と「不二摩訶衍法」に本覚思想を導入した「不二本覚」があげられる。

考察の方法としては、まず『釋論』における「本覚」の構成とその位置について確認をおこなう。その後、上記『開題』類について、「本覚」が明記され、その思想を踏襲しているものについてグループ化を行い、共通項を抽出して検討してみたい。最終的には『釋論』の「本覚」と『開題』類の「本覚」について比較を考えている。

## 二 『釋摩訶衍論』の本覚理解

『起信論』や『釋論』における「本覚」について既に多くの先行研究が提出されている。<sup>(2)</sup> 本項では『釋論』の「本覚」について考察してみたい。前述のとおり『釋論』は『起信論』の注釈書である。『起信論』において「本覚」の語が初めて説かれることからまずは所説の「本覚」についてみてみる。

心生滅者。依<sub>レ</sub>如來藏<sub>ニ</sub>故有<sub>二</sub>生滅心<sub>一</sub>。所謂不生不滅與<sub>二</sub>生滅<sub>一</sub>和合非<sub>レ</sub>一非<sub>レ</sub>異。名為<sub>二</sub>阿梨耶識<sub>一</sub>。此識有<sub>二</sub>二種義<sub>一</sub>能攝<sub>二</sub>一切法<sub>一</sub>生<sub>二</sub>一切法<sub>一</sub>。云何為<sub>二</sub>二<sub>一</sub>。一者覺義二者不覺義。所謂心體離<sub>レ</sub>念。離念相者等<sub>二</sub>虚空界<sub>一</sub>無<sub>レ</sub>所不<sub>レ</sub>遍。法界一相即是如來平等法身。依<sub>二</sub>此法身<sub>一</sub>說名<sub>二</sub>本覺<sub>一</sub>。何以故本覺義者。對<sub>二</sub>始覺義<sub>一</sub>說。以<sub>二</sub>始覺者即同<sub>二</sub>本覺<sub>一</sub>。始覺義者。依<sub>二</sub>本覺<sub>一</sub>故而有<sub>二</sub>不覺<sub>一</sub>依<sub>二</sub>不覺<sub>一</sub>故說<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>始覺<sub>一</sub>。

(『大乘起信論』・大正三三卷 五七六頁中)

「本覚」とは「生滅門」側の説示として登場する。「一心」・「二門」・「三大」の構造にある「二門」の「真如門」と「生滅門」の二種の内、後者より説示されるのである。そして「心生滅」の語句解釈で「本覚」が登場する。つまり「心生滅」とは「一心」から展開する「生滅」の在りかた、すなわち「生滅門」をあらわす。その性質が「不生不滅」と「生滅」が和合し、一切法を撰する側と、生ずる側の二種の側面が説かれている。「生滅門」は「不生不滅」の淨法と「生滅」の染法が和合し、一切法の「撰」と「生」の立場としてしていると推察する。

そして「覚」について「心体の念を離れ」と説く。また、「念相」を離れるとは「如來の平等法身」であるとする。この「法身」に「本覚」が依ると説き、「本覚」が「法身」と関係して説かれている。その内容は覚↓心体離念相↓虚空界↓如來平等法身↓本覚となる。

さらに本覚に対し始覚が説かれ、本覚の名に対して説かれるとする。「覚」の展開として説かれる「本覚」と「始覚」は、根本的には一体の覚とした結びつきを持っている。だが二種は、本覚を「如來平等法身」と説き、始覚は、本覚を拠り処とする反面、不覚<sup>(3)</sup>にも依拠すると説くのである。つまり「本覚」は「不覚」に依らない「法身」のみの覚である

## 『開題』類における本覚について（関）

ことを確認できる。

覚と不覚は「生滅門」において染と浄が和合し多様な形質へと展開されたもので、それらが本覚・始覚・不覚の三種ということになる。「本覚」が有する性質は、「始覚」・「不覚」に依らない「法身」をあらわす。それはおそらく「生滅」と和合しない「不生不滅」の立場をあらわしていると推察する。一方で「不覚」は「覚」に対して説かれることから、「覚」から展開する「本覚」と対象的であるといえる。

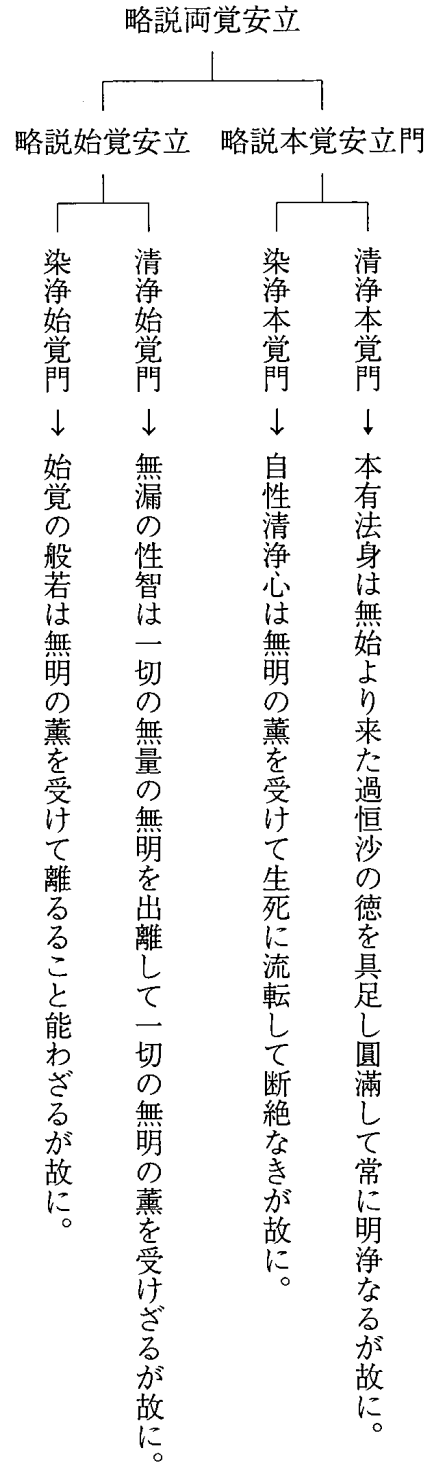
それでは「本覚」における「法身」の性質について考えてみると『起信論』は、

真如用者。所謂諸佛如來。本在因地發大慈悲。修諸波羅蜜攝化衆生。立大誓願盡欲度脫等衆生界。亦不限劫數盡於未來。（中略）以有如是是方便智。除滅無明見本法身。自然而有不思議業種種之用。即與真如等遍一切處。又亦無有用相可得。何以故。謂諸佛如來唯是法身智相之身。第一義諦無有世諦境界<sup>(4)</sup>。

とある。これは真如の用の説示である。智をもつて無明を除滅させ「本の法身」を顕すと説く。真如の不思議な働きの中に、真如と智が共にあり、一切處に遍満すると説くことから法身に智が関係しているのを確認できる。

法身の智が無明を除くことにより顕れる「本の法身」と「智」の關係に注目すると、『起信論』の法身には智と真如が關係している。本覚と「法身」の關係の中にも智が内在していることになる。つまり本覚とは智と共にある真如の働きを包含した法身と結びつきをもつ覚ということになる。では、『釋論』の本覚理解を考察してみたい。『釋論』の解釈については、「略説兩覺安立門」をたよりに考えてみたい。その内容を図としてみる。

そこには『起信論』の「本覚」・「始覚」・「不覚」の三種の構造とは異なり、図式的に清浄本覚・染浄本覚の二種と、清浄始覚・染浄始覚の二種の計四種の構造で、清浄と染浄の枠組みにおいて対応する關係になっている。清浄本覚とは、「本有法身」を主語として説く。染浄本覚とは、「自性清浄心」を主語として説き、無明による熏習を受けるとする。この染浄とは『起信論』における「不覚」と近い思想であると推察でき、清浄なものが無明の熏習を受けている状態である。



|       |      |      |
|-------|------|------|
| 『起信論』 | 『釋論』 |      |
|       | 清浄本覚 | 清浄始覚 |
| 『不覚』  | 不覚   |      |
|       | 染浄本覚 | 染浄始覚 |

清浄始覚をみると、「無漏の性智」が主語として説かれており、染浄とは無縁な状態である。一方、染浄始覚では「始覚の般若」を主語として無明の影響を受ける状態であると説く。清浄・染浄二種の始覚には智があることを説き、その智の明・無明の在りかたを清浄・染浄の二種において説いている。「清浄」の枠組みにおいて「清浄本覚」と「清浄始覚」には「法身」と「智」が関係し、「染浄」の場合では「染浄本覚」と「染浄始覚」に「自性清浄心」と「智」が無明に熏習された状態として関係している。

『釋論』の本覚・始覚の理解は「不覚」を「染浄」として捉えている。「不覚」にまったく依らない「始覚」、そして「不覚」の影響をうける「本覚」と「始覚」があることになる。それは『起信論』では説示されない内容であり、『釋論』の特徴的な本覚理解である。

以上を踏まえて、「本覚」における別な解釈の箇所をみてみたい。そこでは「本覚」を「本」と「覚」に分け各十種の特徴をあげている。資料①参照にその内容を図にのせる。「十本」が「本」の十種、「十覚」が「覚」の十種である。

## 『開題』類における本覚について（関）

その内容には「本」の解釈に、「本有法身」を（清浄覚者・法身如来の自性自体<sup>⑤</sup>）を説く。「覚」の解釈には、「薩般若慧」（一切智慧を説く。つまり「本覚」には清浄本覚の本有法身に加え、一切智慧を備えた智的側面を有する仏身論であると定義していることになる。では次に「本有法身」について考えてみたい。それについて『釋論』の解釈を見てみると、『起信論』所説「心体の念相を離れる」という文を解釈し次のように説く。

謂心體離念相者。即是清浄本覺。心謂即是自性清浄心。體謂即是本有法身體。如是心體即名本覺。（中略）離念相者。即唱清浄本覺人辭者即人故。等虛空界無所不遍者。如是覺者善證具足十種德義虛空理上故。法界一相者。如是覺者於所證之真如法界。而共和合。一味一相無差別故。即是如來平等法身者。善證二種勝妙之理。清浄覺者。即是法身如來自性自體故。依此法身說名本覺者。本有法身自性德中。而作歸依。建立清浄本覺稱<sup>⑥</sup>。

「謂心體離念相」を「清浄本覺」であると説く。つまりこの説示は『釋論』が「清浄本覺」について説いている箇所ということになる。さらに『釋論』は「心體離念相者」をさらに分割し解釈する。「心」を「自性清浄心」、「体」を「本有法身の体」、「離念相者」を「清浄本覺の人」とする。前述の語句解釈はその「清浄本覺」の内実を説いている。「清浄本覺」には自性清浄心と本有法身の体があり、その中の自性清浄心が無明の熏習を受けることにより「染浄本覺」となる。「清浄本覺」は妄念である「念相」を離れた状態であり、浄法のみ覚者ということになる。

次に如来平等法身について考えてみる。『起信論』では「如来平等法身」を「此の法身に依って説いて本覺と名づく」とあり「法身」と「本覺」が関係して説かれていた。『釋論』はこの「依此法身說名本覺」について「本有法身の自性の徳の中に而も帰依を作して清浄本覺の称を建立するが故に」と解釈する。すなわち「如来平等法身」には「本有法身の自性の徳」が関係することになる。

また「離念相者」を「清浄本覺の人」とする説示や「体」を「本有法身の体」とする説示からも、「法身如来の自性自体」は「本有法身の体」を指している。そして「覚者」と「清浄本覺の人」は「法身如来」の「体」となる。さらに「本」と「覚」の十種解釈でも本覺に「本有法身」が主語していることから「如来平等法身」は「本有法身」と「清

「浄本覺」を軸として本質的に一致する思想と推察される。

清浄始覺と染浄始覺の説をもとに考えると、「性智」や「般若」という智慧である智の明・無明による影響の在りかを論じており、「本有法身」は「清浄本覺」という明のみの状態である「清浄覺者」そのものを指すことになる。

一方で、「本覺」・「始覺」の有為・無為について説いている箇所がある。そこは『起信論』所説「不生不滅」・「生滅」解釈で説かれておりそこには、

論曰。總攝一切無為法故。是故名爲不生不滅。不生不滅諸無為法之總相故。總攝一切有為法故。故名爲生滅。

(中略)論曰。無為法有四種。云何爲四。一者真如無為。二者本覺無為。三者始覺無為。四者虛空無為。是名爲

四。有為法有五種。云何爲五。一者根本無明有為。二者生相有為。三者住相有為。四者異相有為。五者滅相有為。

と説いており、「不生不滅」を「無為法」、「生滅」を「有為法」と解釈する。そして「無為法」に「真如」・「虚空」・「本覺」・「始覺」の四種とするのである。「有為法」には「根本無明有為」・「生相有為」・「住相有為」・「異相有為」・「滅相有為」の五種で、無明と「生住異滅」の四相が説かれる。

以上のことから『釋論』は、「不生不滅」と「生滅」が和合することを無為法と有為法が和合すると解釈していることになる。「清浄本覺」と「清浄始覺」は無為法であり、「染浄本覺」と「染浄始覺」は無明に影響されるため有為法に属すると推察する。またここでは、無為法に「真如」・「虚空」が説かれている。今度は「清浄真如」と「清浄虚空」との関係を考えてみたい。その該当すると思われる箇所は、

謂性真如及虚空理。如是二理各有二幾種。各有二故。云何名爲二種真如。一者清浄真如。二者染浄真如。虚空之理亦復如是。云何名爲二種清浄真如。二種淨覺所證真如。離二熏習故。云何名爲二種染浄真如。二種染浄覺所證真如。

不離熏故。虚空之理亦復如是。

とある。本覺と始覺に清浄と染浄の二種の在りかたがあるように、「真如」・「虚空」にも清浄と染浄の二種がある。まず「清浄真如」と「染浄真如」について、前者は「本覺」の説示と同様に「真」と「如」の各十種の解釈において「本

## 『開題』類における本覚について（関）

## ○清浄本覚について

「離念相者等虚空界無所不遍。法界一相即是如來平等法身。依此法身說明本覺。何以故本覺義者。」

心體離念相者

清浄本覺↓清浄本覺の人||清浄覚者（法身如來の自性自体）||本有法身の自性の徳

覚者は善く十種の徳義を具足する虚空の理を証す

覚者は所証の真如法界に於て而も共に和合し一味一相にして差別無きが故に

## ○清浄始覚について

「何以故。本覺義者對始覺義說。以始覺者即同本覺。」

請問辭

直決彼疑

作其所由

清浄始覺↓大智力等で過患の海を對治する―具足圓滿過於恒沙無量無邊功德淨品

清浄本覺↓言語道絶心處滅―而有言說―具足圓滿過於恒沙無量功德

清浄本始覺 從無治已來 遠離一切染 湛明若虚空  
是故此門中 無能熏染法 無所熏淨法 唯有自家徳

## ○染浄本覺と染浄始覺

「始覺義者。依本覺故而有不覺。依不覺故說有始覺。」

種始  
二性  
通離

染浄始覺↓即是離性始覺―依諸染法

染浄本覺↓即是離性本覺―善受染熏

## 資料①

## 清浄本覺

## 十覚

## 十本

## 染浄本覺

①根本事本―本有法身は能く善く一切の功德を住持す。

②本本事本―本有法身は無始より來た自然性有にして始に起こるにあらず故に。

③遠本事本―本有法身は其の有徳の時は重重久遠にして分界無き故に。

④自本事本―本有法身は我自らが我を成するにして他より我を成するに非ずの故に。

⑤体本事本―本有法身は諸の枝徳のために依止となる故に。

⑥性本事本―本有法身に不転の義有り常に建立する故に。

⑦住本事本―本有法身に無住に住し去來無き故に。

⑧常本事本―本有法身は決定實際にして流転無き故に。

⑨堅本事本―本有法身は風相を遠離して堅固不動なること金剛の如くの故に。

⑩総本事本―本有法身は廣大圓滿にして遍ぜざるところ無く通體の故に。

1.鏡字事覚―薩般若慧は清浄明白にして塵累無き故に。

2.開字事覚―薩般若慧は通達顯了にして障礙無き故に。

3.一字事覚―薩般若慧は独尊独一にして比量無き故に。

4.離字事覚―薩般若慧は自性解脱にして一切種種の縛を離する故に。

5.滿字事覚―薩般若慧は無量の種種の功德を具足し少なき所無き故に。

6.照字事覚―薩般若慧は大光明を放つて一切無量の境を遍照する故に。

7.察字事覚―薩般若慧は常恒に分明にして迷乱無き故に。

8.顯字事覚―薩般若慧は清浄な體中に淨品の眷屬が悉く現前する故に。

9.知字事覚―薩般若慧は一切法に於て窮めざるところ無き故に。

10.覚字事覚―薩般若慧は所有の功德は唯覚照有りて一一の法而も覺に非ざる無き故に。

染浄本覺中 或各有十義

前說十事中 各有離性故

論曰。此本覺中或各有十義。所以者何。前十義中各有不守自性義故。

字事配屬依向應知。如是二覺同耶異耶。非同同故非異異故。

以此義故或同或異。或非是同或非是異。是故皆是非而已。

有法身」の「真理」等をあかす。<sup>9</sup> 後者は無明の影響を受ける状態である。「清浄虚空」と「染浄虚空」については、前者について虚空が「無礙」等の無明に影響されないことを「真如」同様各十種の解釈をあげて説く。後者の「染浄虚空」は反対に無明の影響を受けていることをあかす。

「本覚」と「始覚」が無明に影響されない「清浄」の立場と、影響される「染浄」の立場が「真如」と「虚空」にもあり、無為法である「真如」・「本覚」・「始覚」・「虚空」は「清浄真如」・「清浄本覚」・「清浄始覚」・「清浄虚空」の四種がそのまま関係している。逆に、有為法の方は無明に影響される「染浄」の「真如」・「本覚」・「始覚」・「虚空」が関係する。

『釋論』の本覚理解は、「清浄本覚」と「染浄本覚」の二種があり、明だけの状態か、明・無明の相熏習による状態にあるかが説かれる。「清浄本覚」に説かれる「本有法身」には「智」と「理」が説かれている。「清浄始覚」と「染浄始覚」についても、無明に影響されない「始覚」を「清浄始覚」とする。「不覚」が「染浄」の立場として説かれており、「本覚」・「始覚」に「染浄」の名を冠して説かれているのである。本覚の四種理解について図にしたものを載せる。次項よりグループ分けし、『開題』類における「本覚」について考察していく。

### 三 『開題』類における本覚

本項では『釋論』の本覚理解を踏まえて、『開題』類における本覚について考察する。考察に際し、資料のグループ化を行う。それは①『大日経開題』『法界浄心』・「衆生狂迷」・「隆崇頂不見」、②『金剛頂経開題』・『法華経釋』、④『金剛般若経開題』、⑤『梵網経開題』・『釋論指事』における本覚について考察を行う。

#### 三―① 『大日経開題』『法界浄心』・「衆生狂迷」・「隆崇頂不見」

それでは『大日経開題』における本覚について考察する。『大日経開題』には数種の資料がある。そのなかで本項で

## 『開題』類における本覚について（関）

は、「法界浄心」・「衆生狂迷」・「隆崇頂不見」に共通する本覚の箇所をあげ検討をおこなう。ここで説示される「本覚」の語があるのは「一如本覚」である。それではその箇所をあげる。

夫れ法界の浄心は、十地を超えて以って絶絶たり。一如の本覚は、三身を孕んで離離たり。況や復曼荼の性佛は、圓圓の圓。大我の真言は本有の又の本なり。風水の龍、其の波瀾を動ずること得ず。

（『弘大全』一輯）

とここでは「一如本覚」が説かれる。他に「本有」の語は『釋論』所説の「本有法身」を連想させる。「圓圓」・「風水龍」等についても語句の援用と推察する。ここでの「一如本覚」とは、後に考察する『法華經開題』においても説かれている。すなわち『法華經』の具名である「妙法」について六重の浅深を「六種本覚」として示す。下から「染浄本覚妙法」・「清浄本覚妙法」・「一心法界本覚妙法」・「三自本覚妙法」・「一如本覚妙法」・「不二本覚妙法」となる。

つまりここでの「一如本覚」とは上から二番目の本覚となる。そして「一如本覚」には「三身」が含まれていることになる。「復曼荼の性仏」とは曼荼羅の諸仏をあらわし、「円円の円」は「一如本覚」の上位「不二本覚」に該当する「不二摩訶衍法」にあたると推察する。すなわち『釋論』は「不二摩訶衍法」を説示する際、「性徳円満海」<sup>⑪</sup>や「円円海徳諸仏勝」<sup>⑫</sup>と説いている。後者の方が類似性を強く感じる。「不二摩訶衍法」を「曼荼羅の性仏」と規定しており、その曼荼羅諸尊が「不二摩訶衍法」説示で登場する「諸仏」というは則是れ不二摩訶衍法<sup>⑬</sup>の説示を巧みに援用していると推察する。

つまり「一如本覚」は顕教の段階であり、「円円の円」は「不二摩訶衍法」で密教の段階であると推察する。「一如本覚」以外の「法界浄心」の立場については、「染浄本覚」・「清浄本覚」・「一心法界本覚」・「三自本覚」が統合されたものと推察する。以上の問題に関して「風水の龍」に注目すると、これも『釋論』所説である。それについて、

一者出生光明龍王。二者出生風水龍王。第一龍王以<sub>二</sub>浄光明<sub>一</sub>而為<sub>二</sub>依止<sub>一</sub>。第二龍王以<sub>二</sub>風水徳<sub>一</sub>而為<sub>二</sub>依止<sub>一</sub>。二種本法出生龍王亦復如是。一體本法以<sub>二</sub>純浄法<sub>一</sub>而為<sub>二</sub>其體<sub>一</sub>。三自本法以<sub>二</sub>染浄法<sub>一</sub>而為<sub>二</sub>其徳<sub>一</sub>故<sup>⑭</sup>。

とある。これは「一体摩訶衍法」と「三自摩訶衍法」における「十種名」の説示箇所である。その二法の別名として

「風水龍王」が説かれる。「一体摩訶衍法」は「光明龍王」で浄法をあらわし、「三自摩訶衍法」は「風水龍王」で染浄法をあらわす。『大日経開題』の「風水龍」は染と浄の法を表現していることになる。浄法の立場は「一如本覚」、染浄法の立場は「法界浄心」となり、「一如本覚」以下の四種の本覚は三自門すなわち「生滅門」所入の法をここでは説いている。

「本有」については、これも『釋論』所説「本有法身」が当てはまると考える。この法身は「清浄本覚」を説示する際に登場する。「大我」である法身大日如来の真言が「本有の又の本」とあることから、「本有法身」の根幹に位置するのが大我である法身大日如来の真言であると推察するのである。真言の性質が『大日経開題』において浄法と染法が波瀾を及ぼすことができないことを「風水の龍」を用いて説いている。

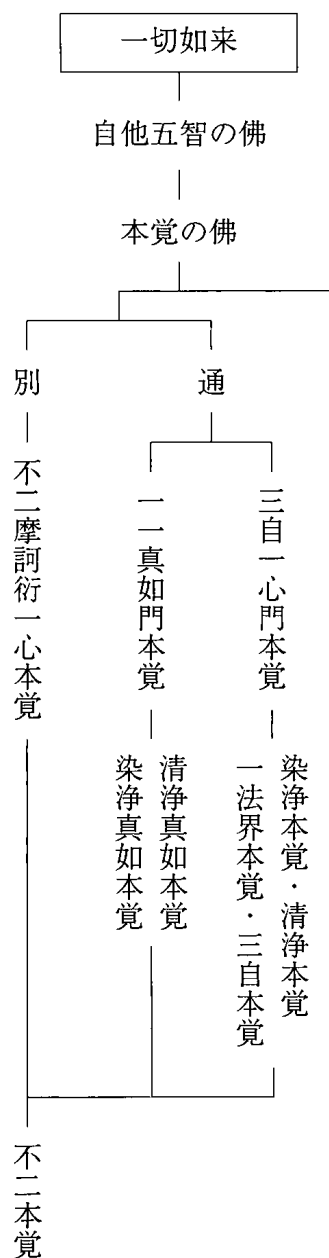
一方で「三身」等に関して『大日経開題』は大日経の具名について

大毘盧遮那とは自性法身即ち本有本覚の理身なり。次に成佛とは受用身なり、此れに二種有り、一には自受用身、二には他受用身にして、修得即ち始覚智身なり。神変とは他受用応身すなわち変化法身なり。加持とは等流身即ち是れ三界六道随類の身なり。若し四を撰して三と為さば、神变加持を合わせて一と為す。即ち法応化の三身、次の如く知んぬべし。次に三大に配して釈せば、大毘盧遮那とは体なり。成佛とは相なり。神变加持とは用なり。

（『弘大全』第一輯）

と説いている。「大毘盧遮那」を「自性法身」として「本有本覚の理身」と示す。この「本有本覚の理身」とは「清浄本覚」説示にある「本有法身」を暗に示している。「本有」を「本有法身」とするならば、関連している「本覚」は「清浄本覚」となる。つまり『釋論』所説「清浄本覚」における「本有法身」を援用していることになる。それに加え「受用身」において「始覚智身」と示す。これは「清浄始覚」における「薩般若」の「智」における「本有法身」の説示を意識的に引いている。『釋論』説示において「清浄本覚」に「本有法身」、「清浄始覚」に「智」を主語として説いていることから、ここでの説示は「本有法身」に内在する「理」・「智」を「四種法身」における「自性法身」と「受用

## 『開題』類における本覚について（関）



では次に『金剛頂経開題』における「本覚」についてみてみる。説示箇所と図にしたものをのせる。この図は本覚における解釈を簡略化したものである。委しくは資料②を参照願いたい。

今この経に示すところの本覚は、通じては一切本覚を摂し、別しては不二門の本覚を表す。この本有法身はその数無量なり。故に一切如来と云う。（中略）然もこの不二の本覚は、能く一切門の佛を摂す。（『弘大全』一輯七〇一頁）

## 三―② 『金剛頂経開題』

「身」説示に用いている。

そして「三身」については、「法応化」の三身と説く。「一如本覚」における「三身」とは、この説を見る限り「法応化」の三身となるだろう。この「三身」についても、『釋論』は「三大」と関係して論説している。小論では紙幅の都合上触れない。

本考の『大日経開題』における「本覚」についてまとめると、「一如本覚」が説かれており、『法華経開題』の「六種本覚」思想を取り入れたものといえる。そして「一如本覚」に「法応化」の「三身」があると説く。一方、「自性法身」に「本有本覚の理身」、そして「多受用身」に「始覚智身」と説いている。『釋論』の「清浄本覚」・「清浄始覚」の「理」・「智」における説示を援用している。

『金剛頂經開題』は、『金剛頂經』の具名である「金剛頂瑜伽一切如来真実撰大乘現証大教王經」について解釈したものである。

この「金剛頂經」という經の本覚とは「通」には「一切本覚」を撰し、「別」には「不二本覚」をあらわして一切門の仏を撰すと説く。そして具名の「一切如来」の語について「本有法身」が無量にあると説く。

そこで「一切如来」の論説をみると、「通」に「三自一心門本覚」と「一一真如門本覚」。「別」に「不二摩訶衍一心本覚」と説く。詳しくは「通」の「三自一心門本覚」より「染浄本覚」・「清浄本覚」・「一心法界本覚」・「三自本覚」が説かれ、「一一真如門本覚」からは「染浄真如本覚」・「清浄真如本覚」が説かれる。「別」では「不二本覚」が説示される。「一切本覚」とは「通」の「三自一心本覚」と「一一真如本覚」となり、「別」とは「不二摩訶衍一心本覚」の「不二本覚」となり、「三門」構造であると確認できる。

また、「一切如来」を「本有法身」とする背景を考えると、『大日經開題』で「自性法身」を「本有本覚の理身」とする四種法身の説示と一貫した思想に基づくものと推察できる。「本有法身」には「理」と「智」があることは前項で述べた。それを四種法身において「自性法身」を「理身」と論説し、「受用身」を「智身」としたものである。「一切如来」は数が「無量」であることから『大日經開題』とは少々異なるが四種法身全体の立場を「無量」である「理」・「智」をそなえた「本有法身」と一括りに当てはめ説明している。

『弁頭密二教論』の説示をみると、「不二摩訶衍法」を「自性法身」とする<sup>(15)</sup>。『大日經開題』の説示を見る限り、「不二摩訶衍法」は「自性法身」で「理身」となる。「理身」と「智身」の関係について後ほど検討してみたい。

『金剛頂經開題』の本覚は『法華經開題』所説「六種本覚」と異なる形態で展開している。それは「清浄真如本覚」と「染浄真如本覚」が説示されている点である。『釋論』では「清浄本覚」・「染浄本覚」・「清浄始覚」・「染浄始覚」・「清浄真如」・「染浄真如」・「清浄虚空」・「染浄虚空」が「不生不滅」と「生滅」における有為法・無為法の関係において説かれている。ここでは「清浄始覚」・「染浄始覚」・「清浄虚空」・「染浄虚空」は説かれない。あきらかに『釋論』の

## 『開題』類における本覚について（関）

思想を援用した独自の展開であり、「一一真如門」である「真如門」から「染浄真如」と「清浄真如」に本覚思想を当てはめている。

「六種本覚」と共通する本覚は、「染浄本覚」・「清浄本覚」・「一法界本覚」（一心法界本覚）・「三自本覚」である。上記以外の「一如本覚」と「染浄真如本覚」、そして「清浄真如本覚」の関係が問題となる。『金剛頂経開題』では前述の通り「三門」構造で本覚を説示している。つまり「真如門」の所入の本覚が「染浄真如本覚」と「清浄真如本覚」となる。「一如本覚」も『大日経開題』の考察から「真如門」所入であることから、前二種の「真如本覚」は、「一如本覚」を「三門」構造によって「真如門」の内容を展開させたものといえよう。

当然「六種本覚」の内「不二本覚」は「不二門」所入の不二摩訶衍法の本覚となり、結果的には計七種の本覚が『金剛頂経開題』において説かれている。

『法華経開題』において「六種本覚」の浅深が説かれる。「不二本覚」を除いた、「五種本覚」の内「一如本覚」が上位の本覚であると説いている。これを踏まえると「真如門」である「一一真如門本覚」は上位の本覚に位置するといえよう。

具名の「真実」についても「真」を「真如」として解釈し、「通」と「別」に分けている。「通」の中に「清浄真如」と「染浄真如」が説かれ、「別」に「自門秘密の真如」とする。「一切如来」と同様な形式で解釈がなされている。この「通」は「一切如来」の「通」に通じ、「染浄真如」・「清浄真如」が「二門」に相応すると説く。「別」では「不二摩訶衍一心本覚」に通じ、「自門秘密の真如」に相応する。「通」は顕教の立場、「別」は密教となる。「通」の顕教の中にも、浅深の段階があり「三門」構造として説示されている。

さらに具名の「現証」説示にも「三門」が説かれ、最終的に「二門」は「不二門」に撰される体裁として共通する。「真実」解釈でも「染浄真如」と「清浄真如」が登場するのは、「一切如来」の解釈を用いている。その解釈の中に『釋論』の十種真如解釈が引かれる。十種の「真」を引き、さらに十種の染浄・清浄の「本」解釈を引いて相応させる。十

種の「如」でも、十種の染浄・清浄の「覚」を相応させ、最終的に清浄・染浄の二種の真如が染浄・清浄の本覚と対応するとし、「一切如来」の「通」と関連付けされている。「真如」と「本覚」の思想をもとに「真如門」と「生滅門」の関係を暗に示していることになる。

「不二門」については『釋論』所説の「三十二法門」の所入法と能入門の構造を「不二摩訶衍法」に導入する。本来、能入門の無い「不二摩訶衍法」に「不二門」を立て「不二門」・「真如門」・「生滅門」の「三門」を展開していることになる。

「一真如門本覚」と「三自一心門本覚」における「三十二法門」の関係は、『釋論』所説「三十二法門」中の前重「一体一心門」と「三自一心門」となるだろう。具名「撰大乘」説示をみると、「能撰大乘」に「根本総体不二大乘」とし、「所撰大乘」に「三十二大乘」を説いている。このことから「三十三法門」の枠組みで「不二本覚」を「不二大乘」、「一真如門本覚」と「三自一心本覚」を「真如門」・「生滅門」として「三十二大乘」として捉えていることになる。

前述した「四種法身」と「本有法身」について考えてみたい。『金剛頂開題』では「金剛頂経」の具名において五仏を配当する。「金剛頂」に「大日尊」、「一切如来」に「阿閼仏」、「真実」に「宝生仏」、「撰大乘」に「無量寿仏」、「現証」に「不空成就仏」とする。

この五仏が「一切如来」の解釈において「五智の仏」として説示されている。すなわち「四種法身の自然自覚」から展開する「通」と「別」の「三門」は、「四種法身」が「本覚の仏」として「五智」から「五仏」の展開がなされていることを暗に示されていることになる。

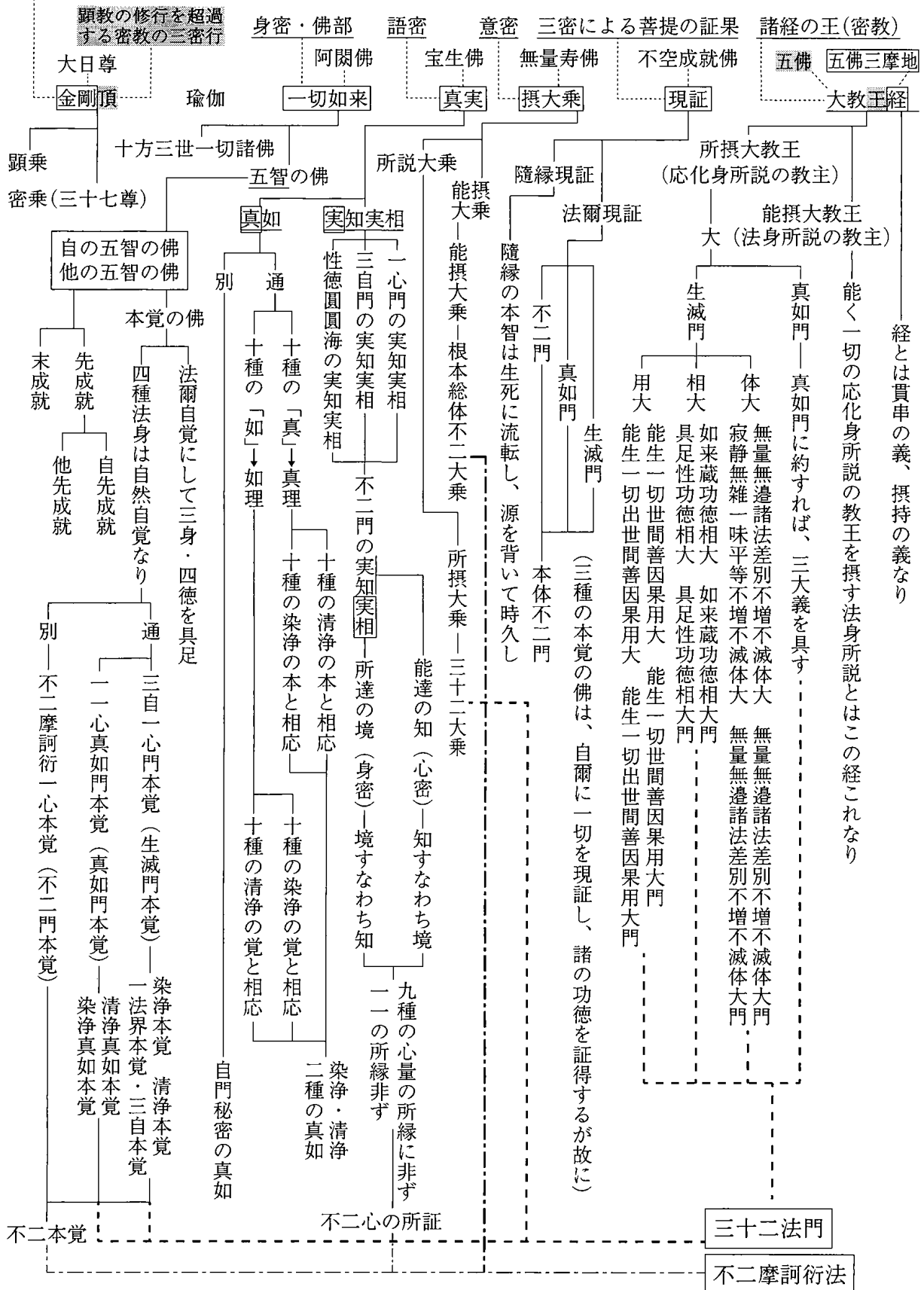
要するに五仏に「智」があり、不二本覚には「本有法身」の関係から「理」がある。そして先の検討から「自性法身」は「理身」で「不二摩訶衍法」となる。「一切如来」を「本有法身」とするのは、その中に理智が内在した「四種法身」があると『金剛頂開題』では説いていることになる。「不二摩訶衍法」が「自性法身」であり「五仏」は「五智の仏」として「一切如来」となる。そして四種法身の枠組みにおいて「理智不二」の「五仏」としている。

## 『開題』類における本覚について（関）

## 『金剛頂經開題』図 資料②

## 法佛の三密

(身密—佛部・語密—蓮花部・意密—金剛部・三密の福德資量—宝部・三密の作業化用—羯磨部)



結果としてこの『開題』でも「六種本覚」をさらに展開させた七種の本覚が説かれる。「三十三法門」の構造を援用し、「生滅門」所入の本覚と「真如門」所入の本覚、そして「不二門」所入の「不二本覚」を説いている。つまり「不二本覚」に四種法身を関連付けて「理智不二」の思想を説いている。

### 三―③ 『法華経開題』『重圓性海』『殞河女人』『法華経釋』

次に『法華経開題』『重圓性海』『殞河女人』『法華経釋』における本覚についてみてみたい。前に習い共通する箇所をあげよう。

#### 『法華経開題』『重圓性海』資料③

いわく妙法とは、しばらく六重の浅深あり。一には染浄本覚妙法、二には清浄本覚妙法、三には一心法界本覚妙法、四には三自本覚妙法、五には一如本覚妙法、六には不二本覚妙法なり。この六重についてしばらく顕密の妙法を分かつたば、初の五は顕の妙法、後の一は密の妙法なり。また前の五が中に初の四は顕、後の一は秘なり。また四の本覚の中にさらに顕秘あり、初めは顕、後は秘なり、次に如く知ぬべし。今の所説の経は染浄本覚の妙法なり。何を以てか知ることを得る。他受用身応化佛の隨機の所説なるが故に。

（『弘大全』一輯七六九頁）

#### 『法華経開題』『殞河女人』『法華経釋』資料④

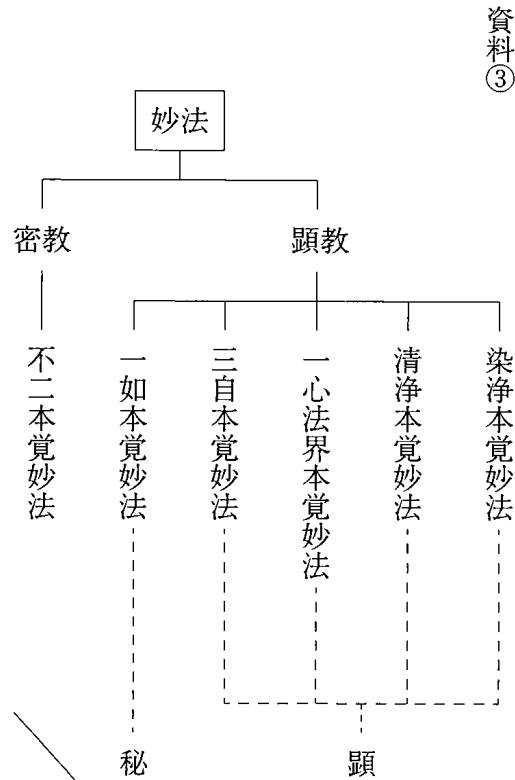
衆生の三密に六重の本覚あり。この本覚に各々三十七、百八乃至微塵数の佛智、四種法身、四種曼荼羅を具す

（『弘大全』一輯）

まず『法華経開題』『重圓性海』と『法華経釋』では、『大日経開題』で述べたように経題の「妙法」解釈に六重の浅深を説く。

「不二本覚妙法」は『金剛頂経開題』の考察の際も説示された如く密教をあらわす。他の「一如本覚」等は、段階を経て、秘と顕と次第に浅深を説く。そのことから「一如本覚」は、五重の浅深でも上位の本覚であると理解できる。

## 『開題』類における本覚について（関）



資料④

知見  
 衆生の三密  
 六種本覚  
 〔各々三十七、百八乃至微塵数の智、  
 四種法身、四種曼荼羅を具す〕

『大日経開題』における「一如本覚」・『金剛頂経開題』における「一一真如門本覚」も同様である。

「染浄本覚」に注目すると、『法華経』という經典を「染浄本覚」所説であるとし、「他受用身応化仏」であると説く。ちなみに前述で述べたように『大日経開題』では「他受用身」を「変化身」と説く。また『弁顕密二教論』では「他受用應化身」による隨機の所説を顕教と位置付けており、『法華経開題』の説示と一致する。以上を踏まえると四種法身においては「変化身」となる。つまり『法華経開題』では六種本覚を經典の所説隨機について浅深優劣にも用いている。

一方で、『法華経釋』等の説示をみると、「六種本覚」が衆生の「三密」理解で説示される。すなわち「六種本覚」に「三十七、百八乃至微塵数の仏智、四種法身、四種曼荼羅」が備わっているとす。『六種本覚』とは「不二本覚」をはじめ「染浄本覚」の六種の本覚のことである。『法華経開題』や『金剛頂経開題』の内容をここでは簡略化して説いている。つまり、「三十七、百八乃至微塵数の仏智」は三十七尊をはじめ曼荼羅の諸尊をあらわし、「四種法身」は「自性法身」・「受用身」・「変化身」・「等流身」で、「四種曼荼羅」は「大曼荼羅」・「三昧耶曼荼羅」・「法曼荼羅」・「羯磨曼荼羅」となる。顕教の三身から密教の四種法身、そして曼荼羅諸尊にいたるまで「六種本覚」によって網羅されている。

「真如門」・「生滅門」・「不二門」から所入される本覚は「本有法身」であり『金剛頂經開題』の「一切如来」所説と同様、曼荼羅諸尊となるだろう。

ここでは「六種本覚」に『釋論』の本覚思想が踏襲されていることを確認できる。本項では前述を踏まえて『釋論』所説「五重問答」の關係について考えてみたい。まずその内容をあげると、(番号筆者)

①若如是者一切行者(中略)。圓滿三身具足四德。如是行者為明無明。如是行者無明分位非明分位。②若爾清淨本覺從無始來。不觀修行非得他力。性德圓滿本智具足。(中略)如是本處為明無明。如是本處無明邊域非明分位。③若爾一法界心。非百非背千是。非中非中背天。(中略)如是一心為明無明。如是一心無明邊域非明分位。④三自一心。摩訶衍法一不能一假能入一心。不能一心假能入心。(中略)實非我名而且於我。(中略)如是勝處為明無明。如是勝處無明邊域非明分位。⑤不二摩訶衍法。唯是不二摩訶衍法。如是不二摩訶衍法為明無明。<sup>16)</sup>

とある。①の一切行者と④の三自一心摩訶衍の次に一如本覚を当てている以外、「五重問答」の内容が一致する。①の「一切行者」は、六種本覚に配置し直すと「染淨本覚」となり、「一如本覚」は④「三自一心」と⑤「不二摩訶衍法」の間に入る思想と推察する。

つまり①「一切行者」は「染淨本覚」、②「清淨本覚」は「清淨本覚」となる。③「一法界心」は「一心法界本覚」、④「三自一心」は「三自本覚」として、次に「一如本覚」が入り、最後の⑤「不二摩訶衍法」は「不二本覚」となる。『釋論』の「本覚」は「生滅門」所説の思想であり、「五重問答」も当然「生滅門」所説である。「五重問答」で「真如門」が登場するわけがないのである。そのため「一如本覚」は説示されない。つまりこの「一如本覚」は空海が『釋論』の思想を受けて、新たに設定した本覚思想となる。

「三十二法門」の「一体一心門」から「一一真如門」が導入され、「三自一心門」から「三自一心門」が導入された空海独自構想であり、その思想が「六種本覚」や『金剛頂經開題』の「七種本覚」に受用する際、「五重問答」の構造を

『開題』類における本覚について（関）

採用し、それぞれの本覚思想が展開されたものといえよう。結果として「不二本覚」を密教として、他の五種を顕教と位置付け、さらにその中にも浅深の優劣を説く本覚の段階を表現する構想へと変化したものと考ええる。

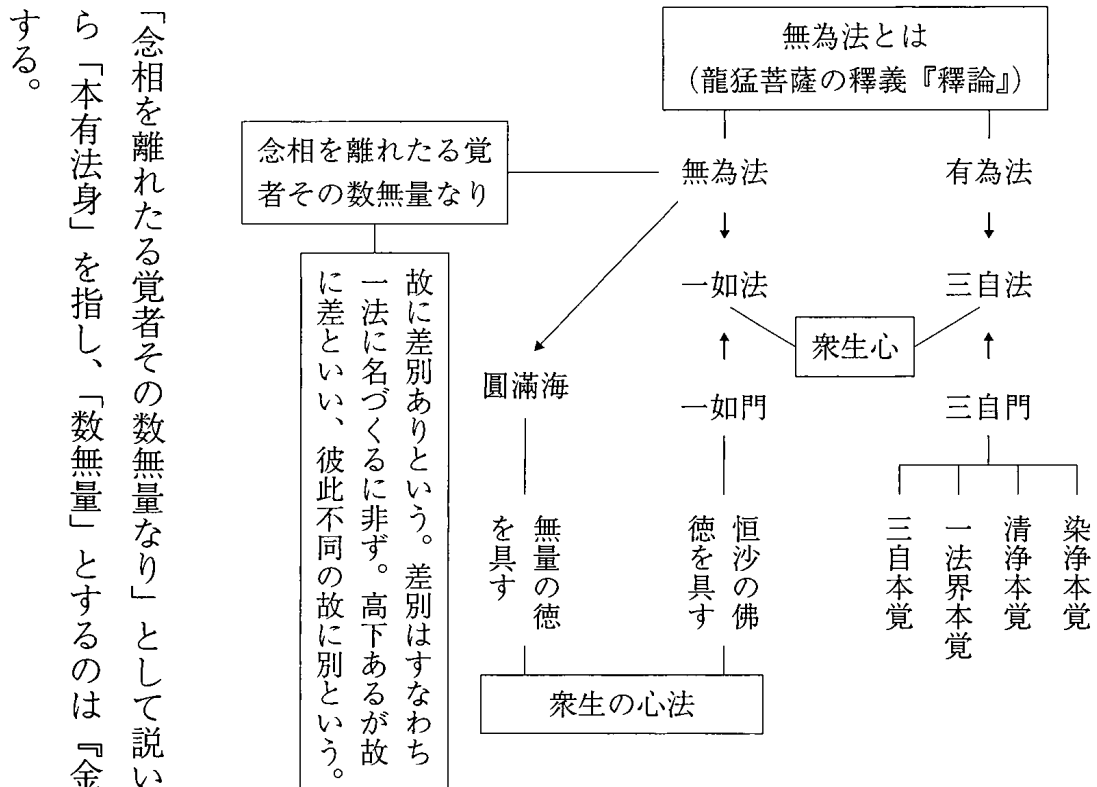
しかし、空海は『法華経』の經典そのものについて「染浄本覚」として經典の浅深にも触れている点を考えると、『法華経開題』と『法華経釋』では下位に位置する經典と捉えている。仮にこの『開題』において教判的思想と近しい構想があるとするならば、『弁頭密二教論』・『秘藏宝鑰』・『秘密曼荼羅十住心論』の教判論において論説される四家大乘を大別する構造に何かしらの関係があるだろう。

つまりは『秘藏宝鑰』において『釋論』の「五重問答」が採用され、法相・三論・天台・華嚴の諸宗に峻別されるのと無縁とは言えない。以上をもとに「六種本覚」をみると『法華経開題』を、最下位の「染浄本覚」とするに對し、『秘藏宝鑰』では『法華経』、つまり宗の根本經典の一つとする天台宗を「五重問答」において第三重に配当している。仮に六種本覚に配当し直せば、「一心法界本覚」となるだろう。要するに問答の重位と本覚の段階において順序が矛盾する。筆者は、經典における本覚の順序と教判における優劣の立場が相違すると推察する。つまり本覚の浅深優劣は『釋論』の本覚思想を援用し經典の本覚（隨機所説）の位置について論じたものとなる。そのため根本經典の所説を旨とし自らの宗の在り方を示しめつつ比較する教判とは場面が相異なるものと考えたい。

### 三—④ 『金剛般若経開題』

では次に『金剛般若経開題』について考察する。内容を図にしたものが左のものである。

無為法とは内外の諸家の談釋紛紜たり。しばらく龍猛菩薩の釋義に約してこれを談ぜば、所謂有爲とは三自法、無為とは一如法、法とは衆生心なり。三自門に染浄、清浄、一法界、三自の四種本覚あり。一如門の中にまた恒沙の佛徳を具し、圓滿海の中にまた無量の徳を具す。是くの如くの諸徳は皆これ一衆生の心法なり。この心法は皆、無明大念の作業を離るるが故に無為と名づく。皆、念相を離れたる覚者その数無量なり。故に差別ありという。差



別はすなわち一法に名づくるに非ず。高下あるが故に差とい、彼此不同の故に別という。云云 (『弘大全』一輯八三八頁) 『金剛般若經開題』では、「無為法」について龍猛菩薩の釋義を用いて説くとする。「釋義」とは『釋論』の所説を指す。有為を三自法、無為を一如法とし、二種の法を衆生心であると説く。龍猛菩薩の釋義として『釋論』引用する姿勢は、他の『開題』類に無い積極性を感じる。

三自門の中に染淨本覺・清淨本覺・一法界本覺・三自本覺の四種、一如門の中には名が説かれていないが「一如本覺」か「清淨真如本覺」、そして「染淨真如本覺」が該当すると考えられる。また、「円満海」にも名が説かれていないが、「不二摩訶衍法」を「性徳円満海」とする『釋論』の説示を引いている以上、「不二本覺」と推察される。ここでも「六種本覺」もしくは「七種本覺」が説示されている。

また、『釋論』所説「離念相者」を「清淨本覺の人」する説を、「念相を離れたる覺者その数無量なり」として説いており、意図的に援用している。この「覺者」とは今までの検討から「本有法身」を指し、「数無量」とするのは『金剛頂經開題』の「一切如来」説示を意識した形で諸仏を指すと推察する。

「無為法」と「有為法」について考えると、『釋論』では『起信論』所説「不生不滅」と「生滅」を解釈し、前者を「無為法」、後者を「有為法」と説く。さらに「無為法」に真如・本覺・始覺・虚空の四種を説き、「有為法」に根本無

『開題』類における本覚について（関）

明・生・住・異・滅の五種を説く。それらもとにみると、有為法である「三自門」には「染浄本覚」・「清浄本覚」があり、『釋論』の説示と異なる。

一方で無為法である「一如門」には明確に本覚が説かれていないが、『金剛頂経開題』を踏まえると「清浄真如本覚」と「染浄真如本覚」が当てはまると推察する。「円満海」についても「不二本覚」該当すると考えられる。

結果としてここで説かれる本覚とは『金剛頂経開題』の七種の本覚が説かれており、「無為法」の内容も『釋論』所説の「無為法」とは異なっている。『開題』類における本覚の有為法と無為法の関係は、『金剛般若経開題』を踏まえると、『金剛頂経開題』や『大日経開題』、そして『法華経開題』の六種本覚や七種本覚の内、「不二本覚」・「一如本覚」や「不二摩訶衍一心本覚」・「一真如門本覚」は無為法となり、それ以外の「三自本覚」や「三自一心門本覚」は有為法となる。どれも『釋論』では説示されないもので、空海の独創といえよう。

ただ「生滅門」を有為、「真如門」を無為として所説の本覚思想を援用する空海の発想は、生滅を染浄法、真如を浄法とする性質を踏襲した見解に立って導き出されたものといえる。そのため染浄法である「生滅門」所入の本覚と、浄法である「真如門」所入の本覚があることを留意する必要があるだろう。

### 三―⑤ 『梵網経開題』・『釋論指事』

最後に『梵網経開題』と『釋論指事』について検討してみたい。

#### 『梵網経開題』

一体と法とにまた三義あり、三大と名とこれなり。三大とは体大、相大、用大なり。真如門の三大は定相あることなし、互相に二を具するが故に。三とは生滅自門の三大をもって名づく。各々その相あり、自性差別の故に。この三大の法に三十二法門眷屬を具す。摂大体性の五大を加うときはすなわち三十七なり。これすなわち三十七佛なり。

（『弘大全』一輯八一六―八一七頁）

## 『釋論指事』

この中には兩輪具闕益損門を説く。また勸劣向勝不退門を説く。また勸修利益分。この中にこの不二摩訶衍法と三自摩訶衍とを授かることを説く。また龍猛菩薩の觀誠を説く。

（『弘大全』一輯六二二頁）

まず、『梵網經開題』では、真如門に「三大」に「定相」無く、生滅門の三大をもつて三大の三をあらわすと説く。真如門には三大の内、体大に「互相」に二を具するが故とする。これは、『釋論』で説示される体相用と自体相用の問題である。本論『起信論』では、真如門に体のみを配し、生滅門に体相用を配当する。それを『釋論』は、『起信論』の体相用の構想を踏襲して、真如門にも三大を認めたことによる。『梵網經開題』のみならず他の『開題』類の解釈にも広く影響を与えている。

『梵網經開題』の三大には、「三十二法門」が具備されているとして、さらに「攝大体性の五大」を加えて、三十七として三十七佛（尊）を説く。『金剛頂經開題』で、三十二に五智仏を合わせた三十七仏と説くことから、ここでの五大は五智五仏の背景思想が窺える。

またこの『開題』では『釋論』所説「三十二法門」に「五仏」を合わせて「三十七仏」と説いている。つまり、「三十三法門」の内「不二摩訶衍法」を「自性法身」とする説を踏まえると、「不二摩訶衍法」は「法身」であって「五仏」となる。そして「三十二法門」は五仏以外の曼荼羅諸尊となり、「一切如来」に包含される。

次に『釋論指事』を見てみると、「この中にこの不二摩訶衍法と三自摩訶衍とを授かることを説く」とある。「この中」とは「廻向遍布門」である。その内容について「三十二法門」の代表の役割を「三自摩訶衍法」に持たせ、「不二摩訶衍法」をあげて「三十三法門」と解釈している。単なる文章表現の一としてのものなのか判断としないが、『金剛頂經開題』の理解を踏まえると、「三十二法門」を「生滅門」所入の法門と位置付けている。何らかの関連があると推察する。

ここで改めて「六種本覺」と「五重問答」の関係を考えると、「五重問答」は「生滅門」所説である。「不二摩訶衍

## 『開題』類における本覚について（関）

法」は「真如」・「生滅」の境界を超えた法である。つまり「五重問答」では「生滅門」所入の説示と「不二摩訶衍法」の立場が説かれる体裁である。

これを恐らく意識して「三自摩訶衍法」と「不二摩訶衍法」を「三十三法門」に代表させ説示したと推察するのである。

## 四 ま と め

本考察において知り得たことをまとめたい。

本覚について『起信論』と注釈書である『釋論』をみた結果、『起信論』では「生滅門」において「覚」・「不覚」が説かれる。その構造は本覚・始覚・不覚の三種であった。『釋論』では「本覚」を「清浄本覚」・「染浄本覚」とし、「始覚」を「清浄本覚」・「染浄本覚」として四種の構造であった。「不覚」については「染浄」という明と無用の和合した状態として説示されている。

さらに考察すると、『起信論』所説「不生不滅」と「生滅」解釈において、前者を無為法、後者を有為法として説いている。無為法には真如・本覚・始覚・虚空が説かれる。それが「清浄真如」・「清浄本覚」・「清浄始覚」・「清浄虚空」を示している。逆に「染浄」の真如・本覚・始覚・虚空は「不覚」の立場であり「不生不滅」である「無為法」と「生滅」である「有為法」が和合した状態であるといえる。

「清浄本覚」の性質は、「本有法身」と関係して説かれており、一方で「清浄覚者」とも捉え解釈する。「染浄本覚」については「自性清浄心」が無明の影響を受けて、その状態を離脱できないとする。「始覚」も同様に明の状態にある「清浄始覚」と、無明に影響させる「染浄始覚」があり「智」が関係し説かれていた。

以上を踏まえて、『開題』類をみていくと、「六種本覚」や「七種本覚」の構造で本覚説示が展開されている。特徴的なのは「不二摩訶衍法」に能入門を立て「不二門」とし、「真如門」・「生滅門」の計三門で本覚を説く。小論で用いた

『開題』類の本覚は『法華経開題』の「妙法」理解に説かれる「六種本覚」、そして『金剛頂経開題』の「一切如来」理解に説かれる「六種本覚」をさらに展開させた「七種本覚」が、断片的な説示や全体的に簡略化させた内容として説かれていることを確認した。

一方で『金剛般若経開題』のなかで説かれる「有為法」・「無為法」の説示を踏まえると、「三自門」は「有為法」、「一如門」は「無為法」として説かれ、『釋論』の説示と異なったものであった。つまり「六種本覚」でいうところの「不二本覚」と「一如本覚」は「無為法」になる。「三自本覚」を含む四種の本覚は「有為法」となると考えられる。また「七種本覚」についてみると、「不二摩訶衍一心本覚」と「一一真如門本覚」所入「清淨真如本覚」・「染淨真如本覚」は「無為法」となり、「三自一心門本覚」所入「染淨本覚」・「清淨本覚」・「一法界本覚」・「三自本覚」は「有為法」となるだろう。

だが「生滅門」を有為、「真如門」を無為として所説の本覚思想を援用する空海の発想は、『釋論』所説の「二門」理解に示されるように、生滅を染淨法、真如を淨法とする性質を踏襲した見解に立って導き出されたものといえる。そのため染淨法である「生滅門」所入の「三自門」の本覚と、淨法である「真如門」所入の「一如門」本覚があることを示していることになる。

「六種本覚」が『釋論』所説「五重問答」の思想を踏襲していることに関しても、「五重問答」が「生滅門」所説の説示であることから「真如門」は説かれてない体裁を空海が独自に本覚理解に援用している。「五重問答」で示される「不二摩訶衍法」は、明・無明の領域を絶離したものであるとする性質を表現するためといえよう。

他にも、『釋論』所説「三十二法門」に「五仏」を配当し「三十七仏」を展開している。そして「不二摩訶衍法」が「自性法身」として「四種法身」との関係論説していた。空海の本覚思想は、『釋論』所説の内容を忠実に引く場合と奔放に援用する姿勢がある。その構想が「六種本覚」等で示されており、単独の本覚として説示されるのではなく、対応する語句や本覚が関係して『開題』類における本覚思想を展開している。一方で段階的な優劣を含みつつ複合体の性

## 『開題』類における本覚について（関）

質を持たせた本覚思想として説かれている。その中で一番上位に「不二本覚」を置き、その本覚の中に「本有法身」といった「理智不二」の法身が内在させながら『開題』類の本覚が説示されている。

## 註

- (1) 田村芳朗著『田村芳朗仏教学論集Ⅰ』三七九—三九一頁 春秋社一九九〇年
- (2) 楠正仁著「釋摩訶衍論における二種の本覚について」(『密教学研究』第十五号所収)・柏木弘雄著「釋摩訶衍論」における本覚思想」(『本覚思想の源流と展開』所収)・渡辺新治著「弘法大師の本覚について」(『密教学研究』第二十五号所収)・中村本然著「『金剛頂經開題』にみる思想的特徴について」(『高野山大学密教文化研究所紀要』第二十号所収)
- (3) 『大乘起信論』・大正蔵三十二卷 五七六頁中
- (4) 『大乘起信論』・大正蔵三十二卷 五七九頁中
- (5) 『釋摩訶衍論』・大正蔵三十二卷 六一五頁上
- (6) 『釋摩訶衍論』・大正蔵三十二卷 六一五頁上—中
- (7) 『釋摩訶衍論』・大正蔵三十二卷 六〇九頁上—中
- (8) 『釋摩訶衍論』・大正蔵三十二卷 六十三頁下—六一四頁上
- (9) 『釋摩訶衍論』・大正蔵三十二卷 六一四頁下
- (10) 『釋摩訶衍論』・大正蔵三十二卷 六十五頁上
- (11) 『釋摩訶衍論』・大正蔵三十二卷 六〇一頁下
- (12) 『釋摩訶衍論』・大正蔵三十二卷 六六八頁上
- (13) 『釋摩訶衍論』・大正蔵三十二卷 六六八頁上
- (14) 『釋摩訶衍論』・大正蔵三十二卷 六〇三頁中
- (15) 『弁頭密二教論』「喩して曰く。所謂ゆる不二摩訶衍と及び圓圓海の諸佛とはすなわち是れ自性法身なり、これを名づけて

秘密蔵となす。また金剛頂大教王と名づく。等覺十地等も見聞すること能わず、故に秘密号を得。具には金剛頂經に説くが如し。」（『弘大全』一輯四八〇頁）

（16）『釋摩訶衍論』・大正蔵三十二卷 六三七頁下

〈キーワード〉 釈摩訶衍論、大乘起信論、本覺、弘法大師、空海